

阿保神社（あおじんじゃ）

開運松原六社参りのひとつ。菅原道真すがわらのみちざねを祀る。社伝によれば、平安時代前半、道真が九州大宰府だざいふに左遷された折、道明寺どうみょうじ（藤井寺市かきじゆに）にいた叔母の覚寿尼いとまごに暇乞いをするため、京都から難波なにわを経て、阿保あおの地を通りここで休息したことから、同社が建てられたと伝える。

阿保の地名は、平安時代初頭、51代平城天皇の皇子であった阿保親王あほがこの地に居住していたという伝承から付けられた。六歌仙のひとりとして有名な在原業平ありわらのなりひらは、親王の5男である。延宝7年（1679）に出された『河内鑑名所記』かがみには、びっしりと家々が立ち並ぶ阿保村の集落や、親王が農民のために灌漑用に掘ったと伝える親王池ちごがいけ（稚児ヶ池ともいう。海泉池かいずみいけの南側の長尾街道沿いにあったが、現在は潰廃）、および親王の墓と口承されていた近くの河内大塚山古墳かわちおおつかやまこふん（西大塚）の挿図が見られる。

本殿右側には、巖島神社と並んで阿保親王を祭神とする親王社が合祀されている。本殿前には「史跡阿保親王住居跡」の石碑が建つ。拝殿に掛かる「阿保神社」の扁額は、阿保親王の子孫と伝え、源姓を名のった西阿保村やすだの保田氏が江戸時代末期に書いたものである。本殿裏にそびえ立つ神木のクスは、高さ16メートル、幹周り4メートル50、根株張6メートルにも及ぶ市内有数の巨木である。